

'educate'の語源解釈におけるイギリス・ロマン主義の思想的影響

— S.T.コールリッジによる「教育」の定義と *OED* —

池亀 直子¹ ・ 高梨 誠²

「教育」の定義をめぐっては、英語の *education* や *educate* の語源としてラテン語の名詞 *educatio* が取り上げられ、この語に「引き出す」の意味があることを理由として、「教育とは生徒や学生の個性や能力を引き出すことである」とする教育言説が散見される。しかし、*educatio* の動詞形である *educare* の意味は「育てる」であって「引き出す」ではなく、「引き出す」の意味を持っているのは英語 *educere* の語源であるラテン語の動詞形 *educere* である。こうした異なる意味を持つ二つの語の混同には、二つの語が類似していたことに加え、19世紀のイギリスで *OED* の編纂が行われた黎明期に、「教育」を「引き出すこと (*educing*)」と定義づけたロマン派の詩人サミュエル・テイラー・コールリッジの思想が影響していると考えられる。コールリッジはアンドリュー・ベルによって提唱された教育システム (モニトリアル・システム) に対する支持を表明する過程で、宗教教育とモラルの育成を重視し、「教育」を「人間精神の能力を引き出すこと」と定義づけ、この定義は *OED* の用例に採用されている。*educate* (*education*) と *educere* (*educing*) を結びつけた「教育」の定義は19世紀後半から20世紀以降の教育関係者に思想的な影響力を持ったが、これに伴って *educate* と *educere* の語源となる *educare* と *educere* の意味を混在させた解釈が成立していくこととなり、こうした語源解釈は今日の教育言説にも影響を及ぼしていると考えられる。

キーワード：ロマン主義、コールリッジ、語源学、*OED*、「教育」

An Influence of the British Romanticism on the Etymological Analysis of the word 'educate': The Definition of 'education' by S.T. Coleridge and the *OED*

IKEGAME Naoko and TAKANASHI Makoto

It is often mentioned that the true education consists not in cramming knowledge into children but in drawing forth abilities or talents from the inside of them because the word 'educate' comes from a Latin word which means 'to draw forth'. However, the word 'educate' is from the Latin 'educare', which does not have the

1 秋田公立美術大学

2 日本西洋古典学会員

meaning 'to draw forth'. In Latin it corresponds to 'educere', the origin of 'educere' in English. This confusion might have been caused from the resemblance of these words, and the notion 'education as drawing forth (educing)' might be originated in modern times since we did not have the concepts like latent abilities or talents to be drawn forth in ancient and medieval times. From the descriptions of 'educate' and 'educere' in the *OED*, published in the nineteenth century, we can find that it is S.T. Coleridge, a British Romantic poet, who related these words in order to express his own thought that 'education consists in educing faculties of human mind'. He owed it to Andrew Bell, who advocated 'education as eliciting emulation or desire of excellence' in his 'monitorial system'. Coleridge changed the word 'eliciting' of the phrase into 'educing' and used it with special meanings to express his thought on religious education and cultivation of moral character in his books and lectures. Since then the phrase 'education as educing' has been mentioned by teachers and scholars of pedagogy as a basis of their thought, sometimes with inaccurate etymological analysis.

Keywords: Romanticism, S.T. Coleridge, Etymology, *OED*, the definition of Education

はじめに

educate や education という英語と、その「語源」を交えて教育問題を論ずる言説を私たちはしばしば目にする¹。そのような言説は、おおむね次のような内容である。「education の語源は、ラテン語名詞 *educatio* である²。この名詞の動詞形 *educare* は、*e-*（「～の外へ」）と *ducare*（「～を引き出す」）に分解できる³。ここから理解できるのは、教育とは本来、生徒や学生が持っている能力あるいは個性を『外に引き出す』営みであって、知識を詰め込んだり規則で個性を押さえつけたりする行為は教育の本来の姿ではない。

確かに「外に引き出す営みとしての教育」という言説は、一見すると真実らしい。しかし、その根拠となっている語源分析には、二つの問題があると考えられる。

一つは、educate や education の語源として挙げられたラテン語についての説明である。確かに、名詞 *educatio* は動詞 *educare* の完了分詞 *educatum* から生成されたものである。しかし、「～を引き出す」という語義をもつという **ducare* という動詞は、ラテン語では確認できない。ラテン語でこの語義をもつのは *ducere* であるが、この語から名詞 *educatio* は生成されない⁴。つまり、この言説の語源

分析では、異なる二つの動詞 *educare* と *educere* が混同されているのである。教育学者森昭は次のように指摘している⁵。

ラテン語の "educatio" の語源は「エドゥカーレ」(*educare*) であって、これは子供を「育てる」という意味であったという。これに対して「引き出す」を意味するラテン語は「エドゥケール」(*educere*) であった。このように語源が「引き出す」と似ていたので、「エドゥカツィオ」もやがて引き出すという意味を帯びてきたのであろう。

もう一つの問題は、「引き出す」対象（目的語）となっている「個性」「能力」といった概念が、ラテン語動詞とは何の関係をもっていない点である。これも森がすでに指摘しているように⁶、人間に潜在するものとしての「個性」「能力」という概念は、ラテン語が主として用いられていた古代や中世には存在せず、この説明が近代以降になされたことも明らかであろう。

このような問題をはらんでいるとはいえ、この「語源」を根拠とした「引き出す営みとしての教育」という言説は日本以外でも幅広く見られ、一定の説得力をもって受け入れら

れている⁷。しかし、この言説がいったい、どのような過程を経て形成され受容されてきたかについては明らかになっていない。

問題となった英語 *educate* の語源の記述、語源とされた二つのラテン語動詞、そして、このような語源解釈の経緯について検討を進めてみると、実際、イギリスにおいてまず二つの英語の動詞が関連づけられ、教育が「引き出す営み」として定義されて論じられていること、そしてそれを受けて、二つのラテン語の動詞が関連づけられて「語源」として説明されていること、また「引き出す営みとして教育」という言説が、内容の変遷を伴いながら繰り返し論じられていることがわかる。

本稿では、まずこの言説の語源解釈について検討する。英語 *educate* の語源について『オックスフォード英語辞典』(*The Oxford English Dictionary*: 以下 *OED*) の記述を取り上げてその内容を確認し、「語源」とされた二つのラテン語動詞について、それらの用法と関連性を検討する。そして、*OED* にある引用文から「引き出す営み」の根拠となる語源解釈がなされた経緯について考察する。

そのうえで、「引き出す営みとして教育」という言説そのものがいかにして形成されたのか、その背景と後代の受容の様相について考えてみたい。

1 *OED* に見る *education* の語源

ここでまず、「引き出す営みとしての教育」言説での語源解釈の問題について、英語名詞 *education* と動詞 *educate* の語源がどのように説明されているか、*OED* の記述をもとに確認しておきたい⁸。

OED (第1版)における名詞 *education* の項には、動詞 *educate* への参照が指示されている。そして、動詞 *educate* の項では語源となったラテン語とその構成について、次のように記述されている⁹。

Educate (e • djūkeit), v. [f. L. *ēduc* -

ppl. stem of *ēducāre* to rear, bring up (children, young animals)]

ここから、この動詞がラテン語 *educare* の完了分詞 *educatum* の語幹 *educat-* から形成されており、*educate* の語源となったラテン語動詞は、*educere* ではなく *educare* だと考えられていることが確認できる。だが、注目に値するのは、この直後に次のような記述が続いていることである。

related to *ēducēre* (see *EDUCE*), which is sometimes used nearly in the same sense.]

ここで重要なのは、*educare* とは異なる動詞であり、直接の語源とはされていないにもかかわらず、動詞 *educere* が *educare* に「関連づけ」られ、「時にほぼ同義で用いられることがある」と説明されている点である。

また、このラテン語動詞に、英語動詞 *educate* への参照指示が付されている。英語動詞 *educate* は「～を引き出す」という語義をもつ動詞であるが、*educate* とは異なる語であり「～を教育する」という語義はない。*educate* の項には、その語源について次のように記されている。

Educe (e • diūs) [ad. L. *ēducēre*, f. *ē* out + *ducēre* (to lead).]

ここに記述されているのは、*educate* の語源となったラテン語動詞 *educere* の構成である。*educere* は「～から」を意味する接頭辞 *e-* と「～を導く」という意味の *ducere* から形成されている、とされているが、ここで容易に気づくのは、この *educate* での記述が、「引き出す営みとして教育」言説における *educate* の語源分析とほぼ一致していることである。ここでは単なる形態の類似性からではなく *educate* を介して *educate* の語源 *educare* と *educere* が関係づけられていることになるが、

この記述が混乱の要因となっている可能性も考えられよう。

ただこの記述には、異なる動詞である *educare* と *educere* が「ほぼ同義で用いられることがある」という「関連」の内容については、それ以上の説明がなく明確ではない。あるいは、*educare* と *educere* は本来同一の動詞であると考えられるのだろうか。それとも *educere* もまた *educate* の語源と認められる程度の強い関連性があるのだろうか。

2 ラテン語動詞 *educare* と *educere* が同義となる条件

ここで、*educare* と *educere* の形態、語義、用法について確認してみよう。

確かに、この二つの動詞の間には、一定程度の関係があるともいえる。まず、双方ともに、ラテン語辞典において見出しとなる直説法・1人称単数・現在形が *eduo* となるように、形態がよく似ている。また辞典によっては、*educare* の項に語根 (**duc-*) が共通している可能性があることが記述されている¹⁰。

それぞれの語義と用例を確認すると、まず、*educare* は「(子ども・動物・植物など)を養育する」という語義で用いられるが、「～を引き出す」という語義で用いられた例は見られない。他方、*educere* は「～を引き出す」という語義を中心として用いられているが、それとともに「～を養育する」という語義も確かに見られ、その用例も複数確認できる¹¹。では、こういった場合に *OED* にあるような「同義」となるのだろうか。

ここで、それぞれの用例を検討すると、*educere* が「～を養育する」という語義で用いられるさいには、本来、次のような条件があったと考えられる。それは、意味上 *educare* が使用されるべきであるにもかかわらず、それが不可能な場合に限り、*educere* が *educare* の「代用」として用いられる、というものである。

「～を養育する」という語義になる

educere の多くは、韻文作品で多数見出されるものであり、なかでも、紀元前3世紀から2世紀にかけてプラウトゥス (c. 284–184 BC) と テレンティウス (c. 190–159 BC) によって、韻文で執筆された喜劇において用いられているものがほとんどである。そこで、韻文での使用という観点から、この二つの動詞の用例を検討してみたい。

日本語の韻文は、5音と7音など一定の音節数の語が規則的に組み合わせられることで構成されるが、ラテン語においては、音節の長短の規則的な組み合わせを基本単位とし、それが一定数繰り返されることにより詩行が構成される。古代ローマの喜劇は、イアンボスと呼ばれる韻律に従って¹²、それに当てはまる語が台詞として選択・配置される。問題となっている二つの動詞の音節の長短を記号(–U)で示すと、*ēducēre* (長長短短)、*ēdūcāre* (長短長短)となるが、これらはあくまで不定法の場合であって、法・人称・時制などにより多様に変化する¹³。そのため、変化によっては当該の韻律に当てはまらず、使用不能な場合もある。

この韻律による制約という点から考えると、まず、「～を養育する」という語義の *educere* の用例では、そこで韻律上 *educare* を用いることができないことがわかる¹⁴。また、仮に韻律上どちらも使用可能であるならば双方とも同様に用例として現れるはずであるが、どちらも可能である場合は *educare* の用例しか残されておらず、双方可能な場合には *educere* は用いられていない¹⁵。つまり、*educere* が「～を養育する」という語義で用いられるのは、韻律の制約上 *educare* が使用不可能な場合に限られると考えられるのである。

このことは、時代を下った ウェルギリウス (c. 70–19 BC) による叙事詩の場合においても同様である。*educare* は、叙事詩の韻律であるヘクサメトロスでは、イアンボスよりも使用可能な機会が少ない¹⁶。だが使用可能な場合には *educare* が用いられており、使

用不能な場合に限って *educere* が代用されることが指摘されている¹⁷。

もちろん、韻律の制約のない散文作品において *educere* が「～を養育する」という語義で用いられている例もあるが、それらの時期を考慮すると、韻文における代用用法としての語義を踏襲している可能性が考えられる。また「～を養育する」という語義での用例には広がりが見られず、その数は「～を引き出す」でのそれに比して限られている。そうであれば、あくまで *educere* は本来「～を引き出す」という語義を中心に用いられる語であり、「～を養育する」という語義では、一定の条件のもと限定的に用いられた、と考えられよう。

確かに *educare* と *educere* の間には、形態や語義に一定程度の同一性は認められるものの、残されている用例を検討する限り、これらが同義になるのは限定的な場合のみである。この二つの動詞が本来同一であり、*educere* もまた *educate* の語源となっていると判断するのは難しいといえる¹⁸。

3 OED 用例文から見る educate の語源記述の過程

では、一定程度の関連性はあるとはいえ、直接の語源とは異なる *educere* が OED で言及されているのはなぜだろうか。

ここで *educere* の項の記述をさらに辿ると、3番目の語義に示されている用例¹⁹のなかに、次の一文を見出すことができる。

1816 Coleridge *Lay Serm.* 328 Education
--- consists in educing the faculties and forming the habits.

この文はイギリスのロマン派詩人コールリッジ (1772–1834) による著作からの引用であるが、「教育とは、能力を引き出し、そして習慣を形成する営みである」という内容は、本稿で問題とされている教育言説と一致して

いることは明らかである。見出し語の適切な用例を、包括的に年代順に収載するというこの辞典の編集方針からすると、コールリッジが「引き出す営みとしての教育」言説をその著作で展開している可能性が高い²⁰。そして、OED における語源記述の過程については、必ずしも明確にはされていないものの、このコールリッジによる引用文が見出されたことで、次のような推測が成り立つ。

educate の語源を記述するさい、編者にはコールリッジによるこの「引き出す (*educere*) 営みとしての教育 (*education* < *educate*)」という言説が想起され、*educate* と *educere* の関係を記述することによって、それを表現しようとした。だが、この二つの英語動詞は直接の関係をもたない。そこでそれぞれの語源で「時に同義であった」ラテン語 *educere* と *educare* を引き合いに出し、それらを「関連づける」ことで、念頭にあったコールリッジの言説を表現したのではないか。

この推測に対しては、当然ながら大きな疑問が生じうる。ある言語に関する包括的な辞典の編者が、一詩人の言説に影響を受けて特定の語の語源について記述する、また直接の語源ではない語まで言及するということは私たちには想像しがたい。

だが、OED の黎明期に目を向けてみると、後の OED の原型となる大型英語辞典の刊行構想、そして初期の OED 編集者たちとコールリッジが実際に深い関わりをもっていたことが、マキュージックの研究によって明らかにされている²¹。コールリッジと語源研究、「引き出す営みとしての教育」という言説、また OED の編纂が開始されるまでの経緯との関係について、それに従って確認してみたい。

4 コールリッジと黎明期 OED との関連

コールリッジは『抒情詩集 (*Lyrical Ballads*)』(1798) などの作品によって詩人としての名声を得る一方で、様々な語彙の語

源について独自の研究を行っていた。

1798年、かねてから言語の歴史に関心をもっていたコールリッジは、当時言語学研究の中心地だったドイツ・ゲッティンゲン大学に留学する。その大学でのゲルマン語史研究を通じて、とりわけ言語の起源に強い関心を寄せるようになった。

翌年ドイツから帰国したコールリッジは、類似する語彙を取り上げ独自の語源解釈を含めながら、それらの相違や関連性、語彙使用の適切さを分析する作業を精力的に行っている。その作業は様々な主題設定に従ってなされており、その成果の多くは講演や著作に残されている²²。

なかでも「引き出す営みとしての教育」という主題は、コールリッジの講演・著作に頻出するものであった。各々の動詞の語源となったラテン語について直接の言及は見られないものの、コールリッジの語源への強い関心と言語分析の手法を考慮すると、教育を主題にするにあたって動詞 *educere* を想起し、*educate* と結びつけることは不自然ではないだろう²³。

そして、問題となっている *educere* と *educare* の「関連」の記述についても、コールリッジが *OED* 刊行の主唱者や初期の編者となった人々に対して、密接な交流を通じて大きな影響力を持っていたことが、その理由として考えられる。

コールリッジは、語源を用いた自らの言語分析作業を進めるうえで、個々の英語語彙の歴史的な展開を詳細に示す、包括的な大型辞典の必要性を痛感したものの、そのような大型英語辞典は当時のイギリスには存在しなかった。そこで自らその刊行を構想し出版社との契約まで結んだが、最終的に実現はしなかった。

しかし、当時のイギリス言語学会長リチャード・トレンチ (1807-1886) がその構想を引き継ぎ、大型辞典発刊の主唱者となったのである。トレンチはコールリッジとの交流により思想面で多大な影響を受けており、将来編

纂されるべき大辞典について「わが国の英語辞典の欠陥について」と題する講演を行っている。そして自身の著作で「引き出す営みとしての教育」に言及している²⁴。

また、トレンチが編者を外れた後、初期の編者たちのなかで主要な役割を果たしたのは、ヘルバート・コールリッジ (1830-1861) である。彼はコールリッジの孫にあたり、生育した家庭環境からも祖父であるコールリッジの思想に親しんでいたことが十分考えられよう²⁵。この辞典編纂事業はヘルバートが31歳で病死したため、十数年にわたって停滞と中断を余儀なくされたが、その後、ジェイムズ・マリー (1837-1915) ら新しい編者を迎えて編纂事業が再開されたときには、ヘルバートが収集した語彙用例のスリップも引き継がれているという²⁶。

これらを総合すると、*educere* と *educare* が「関連づけ」られている *educate* の語源記述については、*OED* 編纂の比較的初期段階においてコールリッジの影響を受けた人物によって、彼が主張する教育言説を投影した形で記述された、と考えることができよう。

もちろん、現在でも広く見られる「引き出す営みとしての教育」という言説の全てが、*OED* の語源記述を参照し根拠としているということはないだろう。だが、その淵源を *OED* に探ることにより、語源に強い関心をもつロマン派詩人コールリッジが「引き出す営みとしての教育」という言説を展開していること、また語源解釈についてはそれを踏まえて記述されている可能性が確認できた。

5 ロマン派詩人とモニトリアル・システム

本節からはコールリッジの教育思想と、彼が *educate* の語源として *educere* (引き出す) の意を見いだそうとした経緯と思想的背景、および後代への影響について検討する。

教育思想に関するイギリス・ロマン派に対する一般的な理解とは、同時代の抑圧的な教育に批判的な姿勢を取り、作品の中で子ども

の無垢と想像力を美しく歌い上げる芸術家、もしくはルソー（1712-1778）の消極教育思想の支持者といったものも少なくない²⁷。

だがこうした一般的理解に反してコールリッジはルソーの消極教育思想に対してはむしろ否定的な見解を持っており²⁸、逆に教育に対する関心は1808年・1813年の講演や、著作、雑誌論考等で様々に展開される。

コールリッジやワーズワース（1770-1850）、サウジー（1774-1843）等のロマン派詩人が同時代の社会的風潮に呼応して支持したのが、アンドリュー・ベル（1753-1832）らが提唱した新しい教育システム、すなわちモニトリアル・システムである。周知の通りモニトリアル・システムとは18世紀後半から19世紀にかけて慈善学校など貧民層の子ども向けの教育を中心に普及した一斉教授法の総称である。多くの生徒に対して同時に同一内容の教授を可能とした効率性の高いシステムは、今日ではその機械的な側面をはじめ多くの問題点が指摘されているが、ロマン派詩人たちの時代にはランカスター（1778-1838）の提唱したシステムがイギリス国内に広まりつつあった。

モニトリアル・システムとは簡単にいえば生徒を習熟度別のクラスに分け、全体を監督する教師の指導と、成績の良い生徒を「モニター」と呼ばれる助教として採用することを組み合わせ、一斉教授の効果的理解の促進を計るシステムである。またモニター採用に向け習熟度を目に見える形にすることで競争や助け合いを喚起し、教師の権威や罰則に依拠せず向学心や他者を助けることへの達成感を呼び覚ます、という生徒の内面的・道徳的成熟に対する効用も、システムを普及させようとする人々の謳い文句であった。

しかしランカスターのシステムがイギリス国教会の考える宗教教育にとって脅威であると見なされ始めると、サラ・トリマー（1741-1810）をはじめ同時代の教育家や政治家たちがベルのマドラス・システムに対する賛辞を表明するようになる。この動向は、国の教育をいずれのシステムに委ねるかをめぐり、ベ

ル、ランカスター本人と支持者たちが議論を戦わせた「ベル＝ランカスター論争」へと発展した。

ベルの支持者たちの多くはモニトリアル・システムの効用は高く評価した上で、ランカスターの宗教教育が適切な内容ではないとして問題視する。その目的は、国教会の方針に従った宗教教育を選択していたベルへの賛辞を表明することで、貧民層の宗教とモラルについての教育を国教会主導へと転換することにあった。

さて、先述の通りロマン派詩人の多くがベルの教育論には賛辞を寄せている。詳しくは後述するが、コールリッジは講演や著作でベルの教育システムを称賛し、教育とは何かという重要な定義づけにおいてベルの言葉を引用する。また、サウジーは『新しい教育システムの起源、本質とその目的 (*The Origin, Nature, and Object of the New System of Education*)』(1812)でベルの新しい教育システムの発明が「時機を得た」ものであると称賛し、ベルの評伝の編纂にも着手している²⁹。三巻になる評伝の編纂作業はサウジーの息子チャールズに引き継がれ1844年から刊行されたが、第一巻のチャールズによる序文では「父の古い友人であるワーズワース氏」の助言に対して謝辞が捧げられている³⁰。そのワーズワースは代表的作品『逍遙 (*The Excursion*)』(1814)でベルの新しい「発見」を称賛している。

ベル博士の発見はこのことの実現に素晴らしい適性を示している。そして見識ある誠実な管理のもとにこの単一のエンジンを広く適用することで人類にもたらされる利益について買いかぶることはあり得ない³¹。

引用文の「このこと」とは「規則に従わせること」を指しており、また「エンジン」はマドラス・システムにコールリッジが与えた称号である「モラル・スチーム・エンジン」、

すなわちモラルの育成に関して蒸気機関に匹敵する成果を生み出す画期的な発明を踏まえての表現であろう。つまりワーズワースは教育の硬直性を批判した『序曲 (*The Prelude*)』(1805, 1850) の記述とは対照的に、ベルの教育システムが普及することは「人類に利益をもたらす」と賛辞を寄せていることになる。

こうした、しばしば「消極教育思想の推進者」と理解されてきたロマン派詩人らの矛盾するかに見える言動について、先行研究では複数の解釈がなされている。第一にリチャードソンらのようにロマン派による教育システムへの支持は限定的、一時的なものであるという解釈がある。すなわち過酷な労働を強いられる貧民層の子どもたちをめぐる当時の悲惨な状況において、モニリアル・システムの起用は児童労働を抑止する動きがあると考えられた、あるいは1845年頃までにモニリアル・システムへの関心は薄れたというものである³²。

第二にロマン派の詩作において、社会化はむしろ重要な主題であり続けたというヒッキーなどの解釈がある。ヒッキーはワーズワースの『序曲』と『逍遙』の二つの長編を分析し、人間精神の成長が一貫した主題となっていることを理由にモニリアル・システムへの関心はロマン派による「転向」とは見なせないと結論づけている³³。

さらに第三の解釈は、第二の解釈と同じくロマン派には教育に対する関心が継続して存在し、その上でその関心は別の関心事と連動していたとするものであり、たとえばコールリッジの教育論をマルサス(1766-1834)の人口論に対する反論と見るコンネルや、その背景には道徳哲学や倫理・宗教思想が存在すると考えるロックリッジ、ヘッドレイらが挙げられる³⁴。

様々な状況を考え合わせると第一のロマン派による教育に対する関心は限定的、一時的なものであったという解釈は成り立ちにくい³⁵。本稿ではロマン派にとって教育は継続する関心事の一つであったという第二、第三

の解釈を踏襲し、特に第三の解釈、とりわけコールリッジの宗教とモラルをめぐる「教育」の定義づけが、ベルの教育システムに対する支持と連動していたとの立場から議論を進める。

6 「引き出す」行為としての教育

コールリッジが「教育とは引き出すこと」と提示するのは一連のベルに対する支持表明のさなかである。1809年頃から刊行された雑誌『フレンド (*The Friend*)』でコールリッジは教育を次のように定義する。

それ(引用者注:教育)は引き出す(to educate) ことにある。あるいは、ベル博士自身の表現を借用するなら、人間精神の能力を引き出す(eliciting) ことであり、そして同時にそれらを理性と意識に従わせることである³⁶。

ここでは教育が人間の能力を「引き出すこと」と定義づけられているが、コールリッジは教育に関する発言のなかで「引き出す(educe)」「育成する(cultivate)」ことの重要性に繰り返し言及する。1808年や1813年の講演では「教育(Education)」とは「引き出すこと(to educate)」、「呼び起こすこと(to call forth)」であると述べ、花や実が蕾と芽から引き出されるように、人間の能力は教育によって引き出されると主張する³⁷。

コールリッジのこの発言は1808年にマドラス・システムの目的と特徴をまとめて出版したベルの主張をふまえている。ベルはシステムの第一の特徴としてクラス制の採用と、子ども同士で競わせ、学び合うことの重要性を強調し、競争心や功名心を神が人間に与えた尊い資質であるとして次のように述べている。

それゆえ競争や優れたたいという欲望が、これらは創造主が最も賢明かつ高貴なる目的のために人間の胸に植え付けたもう

たものであるが、引き出され（あるいは呼び起こされ）、称賛に値する努力に向けての力強い、止むことのない刺激となる。穏やかで、しかし効果的な訓練の手段として³⁸。

注目すべきは、ベルが「引き出す・呼び起こす」の表現に 'elicited (or called forth)' という語を使用するのに対し、コールリッジは「呼び起こす」の call forth は引き続き使用しつつ、「引き出す」の elicit を educate に言い換えていることである。また、ベルにおける elicit は「生徒の努力を刺激する競争心を引き出す」という文脈で用いられるのに対して、コールリッジが用いる educate の語は教育という営みそのものを指しており、「人間精神の能力を引き出す」と、その目的と対象が拡大されていることも重要であろう。

韻律や語感の効果を考慮して創作を行うことが日常化している詩人コールリッジにとって、ある事柄の定義づけにおける単語の選択は非常に重要な意味を持っていたと考えられる。つまり特定の単語の語源史ではなく、あくまでも「教育」という営みと「引き出す」行為を結合させるために、elicit の語は educate に言い換えられる必要があった可能性が高い。そして educate を語源とするとされた「教育＝人間精神の能力を引き出す」という定義は、その後もコールリッジによって講演や様々な著作の中で繰り返し言及され、やがて *OED* に用例として収められるまでになった。

それではなぜ、コールリッジにとっての教育は「引き出す」という語源的背景を必要とする営みだったのか。この疑問については、コンネルによるコールリッジの『フレンド』における educating の読み替えは、「道徳的、精神的な育成 (cultivation) のプロセスとして『教育』を再定義しようと試みた」ものであるという指摘が手がかりとなる。

コンネルは経済学の視点からマルサスの人口論に対するコールリッジの反論を読み取り、マルサスによる大衆教育批判に対してコール

リッジは国教会を中心とする宗教教育、道徳教育を擁する教育運動を「国の教育」として認識し、教育政策に積極的かつ継続的に関与しようとしたという。そして経済行為を含む様々な行動様式を身につける社会化としての「市民化」と、キリスト教の教育としての「育成」は、コールリッジにおいては厳密に区別されていたという³⁹。つまりコールリッジの「教育とは引き出すこと」には、第一に人間の内的な善性、すなわち宗教的なモラルの育成が想定されていたということである。

ロックリッジやヘッドレイも、コールリッジが教育にとって不可欠な要素にキリスト教の信仰を位置づけ、彼が教育を人間の精神における神聖な潜在力を引き出すことであると考へたと解釈する⁴⁰。さらにヘッドレイは『省察の助け (Aids to Reflection)』(1825)を詳しく分析し、コールリッジが「人類がその環境を、美德によって超越することを引き出す」ことが教育であると考へ、「自由とは善のヴィジョンの結実」であって、この善は教育者からなる社会によって呼び覚まされ、形成されると考へていたと指摘している⁴¹。

つまりコールリッジが教育に「引き出す」という語源の背景を与えようとしたことには、人間の内的な善を適切な導きによって引き出し、育成していくことが重要であるという彼のキリスト教信仰上の信念が関係していた。こうしたコールリッジの態度は、彼が宗教的モラルの解釈において善の先験性を見出し、道徳哲学において功利主義ではなく直観主義の立場を採ったこととも合致する⁴²。

コールリッジにとっては、人間の精神には地中に潜む植物の種のように善の性質が潜在しているのであり、教育とは精神を耕し育成する (cultivate) ことで、種から花を咲かせ実を結ばせるように内なる善を育て引き出す (educate) 営みであると考えられた。それゆえにこそ「教育」は「引き出す」の意をもつラテン語源により近く位置する educate の語によって定義づけられる必要があったのである。

7 後代の教育言説に対するコールリッジの影響

ここまで educate の語源の歴史と、イギリス・ロマン派による「教育」の定義に込められた宗教とモラルをめぐる語源解釈の経緯を検討してきた。だがこうした語源解釈に関するコールリッジとロマン主義の思想は、ベルの思想と国教会の意向を汲んだ同時代の教育運動や教育政策においてよりも、むしろその後の19世紀から20世紀以降の教育思想に大きな影響を及ぼしたと考えられる。

リードはコールリッジ、ワーズワース、サウジーの公教育に対する関心は国教会支持を理由として継続的なものであったと位置づけたうえで、彼らの思想が「ロマン主義的なイデオロギー」⁴³として設立直後のロンドン大学における英文学の教育カリキュラムに少なからぬ影響力を持ったと指摘している。コールリッジやワーズワースが大学で直接に教鞭を取ったわけではないが、大学の設立に関わった人々にロマン派の詩人たちの思想や教育に対する理念が引き継がれていき、英文学科の教育カリキュラムの作成において、文学のテキストと個別の読者の呼応関係が「個人の知識や経験、感情、概念、倫理的な自己形成の技法や精神的成長の成熟」を実現すると考えられたのではないかというのである⁴⁴。

さらにコールリッジの語源解釈が現場の教師達に多様な形で影響力をもったことはジョゼフ・ペイン (1808-1876) の主張にも明らかである。オールドリッチに詳しいが⁴⁵、ペインは19世紀後半に労働者階級の出身でありながら独学で教師となり、私立学校を設立して校長を務めながら教員養成や教員採用試験の作成、私学教育を中心としたイギリスの教育制度の発展に尽力した人物である。彼が編纂した『子どものための選詩集 (Selected Poetry for Children)』(1839)にはコールリッジ、ワーズワース、ブレイク (1757-1827) からロマン派の作品も多く収められ、教科書として活用されて多くの教師が手に取った。

1874年に出版された『教育の科学と方法に関する講義 (Lectures of the Science and Art of Education)』はペインの教育方法論の思想的集大成とも言えるが、ペスタロッチやフレーベルなど幼児教育にも目を配った議論が展開され、ロマン主義の影響を見て取ることができ、かつコールリッジへの直接的言及も見られる著作である⁴⁶。ここでペインは educate および instruct の語源としてラテン語の *educare*、*educere*、*instruere* に言及し、次のように述べている。

教育 (*educare*、すなわち *educere* の反復形の意から、引き出すこと) とは、繰り返しの行為により子どもの力を引き出すことであり、子どもの力を適切な作業に向けて訓練することである⁴⁷。

別の箇所での主張によれば、ペインは *educere* が単独で完結する行為であるのに対し、*educare* は *educere* の反復形 (繰り返し) であり「頻繁に、繰り返し、継続的にそしてそれゆえに力強く永続的に引き出すことを意味する」という⁴⁸。だがペインが何を根拠としてラテン語の *educare* に「*educere* の反復形」を見出しているかは不明確である。ラテン語の動詞の反復形は、完了分詞の語幹 + *are* で作られる。例えば、*dicere* (言う) の反復形は *dictare* (「繰り返し」言う) である。反復形は完了分詞の語幹 *dict-* + *-are* で構成される。これに従えば、*educere* の完了分詞の語幹は *educt-um* であり、その反復形は **eductare* となるはずである。また、*educare* には「引き出す」の意味はないため、仮に語形を反復形にしても「繰り返し引き出す」の意味とはならない。

また、教育における教師の継続的指導において「訓練」を強調するペインの次の主張は、コールリッジの意図とはかけ離れている。

教育者とはそれゆえに訓練者である。その役割が継続的、習慣的、永続的に子ども

もの力を引き出すのである。そして教育は教育者がこの目的のために費やすプロセスのことである⁴⁹。

コールリッジは *instruction* の語に知識の教え込み、型へのはめ込みといった否定的な意味を見出していたが、ペインは繰り返し子どもの能力を引き出すための継続的な反復訓練として *instruction* を重視する。さらにコールリッジの時点では類似の暗示にすぎなかった「引き出す」というラテン語の意味が、ペインに至っては *educate* の語源として定着し、解釈の重点は引き出す行為の継続性や習慣性に置かれている。

「引き出す」行為の継続性や習慣性が強調されるのは、ペインが教育実践において訓練としての *instruction* に肯定的な意味を読み取っていたからだろう。つまりペインにおいては、*education* と *instruction* の意味や目的が語源を根拠として一体化されようとしている。彼がどこまでラテン語の恣意的解釈に自覚的であったかは定かではないが、この事例は異なる意味を持つ語の混同や著者自身の思想によって「教育」の定義をめぐる語源解釈が変容していく可能性があることを示してくれる。

そして *educate* の語源は20世紀以降の教育哲学研究においても定型化される。1972年初版で現在まで版を重ねるラウトリッジの入門書である『教育哲学入門』の中で、編者のスコフィールドは C.J.デュカスの見解として *educare* と *educere* の語源解釈を紹介している。デュカスが解釈を論じる1958年の時点では、すでに *educare* と *educere* の二つの意味が *educate* の語源として定着しており、議論の争点は教育の目的をどこに置くかに移行している。さらにごく近年でも前置きとしてデュカスに対するスコフィールドの見解を加えた *educare* と *educere* のラテン語源の解釈を使用し、そこから議論を膨らませてアフリカの伝統と教育を分析する研究論文が見られる⁵⁰。

おわりに

以上、現在でも広く見られる「引き出す営みとしての教育」という言説の根拠となる英語の語源説明について、*OED* の語源記述と用例などを踏まえて検討した。*educate* のラテン語源をめぐるのは、*educere* の語を媒介として異なる動詞である *educare* と *educere* が関連づけられている。さらに「引き出す営みとしての教育」という言説での語源説明における混乱の要因を巡って *OED* の記述を検討したところ、語源としてのラテン語動詞について、不明確な点が見られた。そして、そのような不明確な語源記述はコールリッジによる語彙研究、また包括的大型辞典である *OED* の刊行までの経緯、そして初期の編者たちに対するコールリッジの思想的影響に由来すると考えられる。

むろんコールリッジがラテン語の *educare* と *educere* を誤用した、あるいはその意味を混同したわけではない。彼に特定の強い意図が働いたのは、「教育」の定義づけにおける *educere* という語の選択の際であったと考えられる。すなわち、ベルがモントリアル・システムで提唱した「(競争心を) 引き出すこと」はコールリッジによって宗教教育、モラルの育成において「(人間精神の能力を) 引き出すこと」という定義を付与されることになったのである。

そして人間精神の育成における重要な論拠としてのラテン語源の解釈は、語源学の領域においては初期の *OED* 編者たちに引き継がれて *OED* に収められ、教育学の領域においては子どもの善なる特質や能力を引き出すという教育思想として後代の教師達や研究者に引き継がれた。またその過程で、ペインの事例に見られるように、単語の語源を示してそこに自らの思想を投影し膨らませていくという傾向や、コールリッジ自身も意図しなかった形での解釈の変化が生じ、今日の教育言説における様々な展開に至っていると考えられる。

なお、今回検討した *educere* と同様に、「育成する (*cultivate*)」の語もまた「教育」の定義に関する重要な議論としてコールリッジに意識されていたと考えられる。「耕やす」の意味を持つこの語をめぐって推測される思想的背景としては、人間の精神を野菜に例えたエドワード・ヤング(1683- 1765)による天才論の影響¹と、自然や植物との親和性を持つロマン主義の芸術の全体的傾向が考えられるが、この仮説の検証には語源の解釈と教育思想の関連のみならず、イギリスにおける新古典主義とロマン主義の天才論、想像力論の再検討が必要であるため、今後の課題としたい。

本稿は「はじめに」と1-4節を高梨が、5-7節と「おわりに」を池亀が分担して執筆した。

注

- 1 例えば、女子学院中学校高等学校院長・校長、風間晴子氏の発言(『朝日新聞』2012年8月25日付朝刊、16面全面広告)、サッカー日本代表元監督・岡田武史氏による講演録 <http://sportsnavi.yahoo.co.jp/sports/soccer/japan/2010/>、岡田氏の発言を引用している潮智史「社説余滴 スポーツとは相いれないもの」(『朝日新聞』2013年2月27日付)などを参照。また小川芳男編『ハンディ語源英和辞典』、有精堂出版、1961年、の記述も参照。
- 2 以下、ラテン語は斜体で表記する。なお、この語は2014年4月からNHK教育テレビで放映されている番組のタイトルとなっている。
- 3 日本経済新聞社が発行する教育情報誌のタイトルは『デュケレ』であるが、英字表記は *Ducare* となっている。
- 4 *educere* の完了分詞は *eductum* であるため。
- 5 森昭「人間形成原論 遺稿」『森昭著作集』第六巻、黎明書房、1977年、36頁。
- 6 森、前掲書、34頁。
- 7 海外の学術論文でも導入部分に同様の言説が見られる。例えば Amasa Philip Ndongfirepi Elizabeth Spiwe Ndongfirepi '(E)ducation or (e)ducation in Traditional African Societies? A philosophical Insight', *Education in Traditional Africa*, 2012, pp. 13-4 などを参照。
- 8 *OED* は、19世紀に刊行が始まった英語語彙に関する世界最大の辞典である。包括的で科学的な記述を標榜し、各見出し語にはその語源と年代順の用例が記載されている。英語語彙の用法についてなんらかの説明が必要とされる場合に参照されることが多い。名詞 *education* の語源解釈が刊行以降になされたものであれば、参照された可能性も十分に考えられる。
- 9 第2版では発音記号の表記法を除いて語源記述の変更はない。なお、最新の第3版は電子版のみで刊行されており、冊子形態は存在しない。
- 10 例えば、『オックスフォードラテン語辞典』(The Oxford Latin Dictionary : 以下 *OLD*) における語源記述を参照。
- 11 *OLD* では、10ある語義のうちの最後に挙げられている。
- 12 イアンボスは、長音節と短音節(ーU)の組み合わせを基本単位する韻律である。
- 13 語末の *e* の長短については後続の語による。ラテン語では、同表記であっても長母音か短母音かで意味が異なる語が複数存在することもあり、*OED* での語源表記で長短の区別がつけられていることには重大な意味がある(第3版からは簡略化され、長音の一部と短音の表記がなくなっている)。
- 14 例えば、プラウトゥス『クルクリオ』518行では、*educere* の直説法1人称単数完了形 *eduxi* を *educavi* (*educare* の直説法1人称単数完了形) とすると音節数が規定数をこえてしまう。
- 15 例えば、テレンティウス『ポルミオ』943行を参照。
- 16 ヘクサメトロスは、長音節・長音節・短音節(ーーU)の組み合わせを基本単位する韻律であり、*educare* のような長音節・短音節・長音節(クレティック: ーUー)を含む語が使用できる機会がほとんどない。
- 17 『アエネイス』第8巻413行とフォーダイス

- による註釈 (C.J. Fordyce, *P. Vergili Maronis Aeneidos libri VII-VIII*, Bristol, 1985, p.359) を参照。
- 18 *ducere* と、これにさまざまな接頭辞を加えた複合動詞は *educere* 以外にも多数あるものの、**ducare* もそれに接頭辞を加えた複合動詞も存在は確認できない。これらを同一の動詞とするならば、母音の長短の相違や *educare* の形成についてさらに説明が必要となる。
- 19 To bring out, elicit, develop, from a condition latent, rudimentary, or merely potential existence.
ここでは、潜在している状態の対象を「引き出す」用例が収められている。それに対して1、2番目に挙げられている語義は、「引き出す」対象が顕在している状態であるが、第1版ですでに廃語とされており、15世紀から17世紀までの用例のみが挙げられている。
- 20 コールリッジ以後になされた他の論者による引用については、後の項を参照。
- 21 James C. McKusick, 'Living Words' : Samuel Taylor Coleridge and the Genesis of the *OED* *Modern Philology* 1992 (90) pp.1-45., 'Coleridge and Language Theory' Frederick Burwick (ed.), *The Oxford Handbook of Samuel Taylor Coleridge*, Oxford, 2009, pp.572-587.
- 22 その分析手法は、コールリッジが自ら造語した *desyonomization* という語で呼ばれる。また、教育以外の主題としては「詩」('poesy' と 'poetry') について取り上げ論じている例などが挙げられる。
- 23 コールリッジはもちろんラテン語にも精通しており、それらの語源となった各々の動詞が念頭にあったことは十分推測できる。
- 24 Richard Chenevix Trench, 'On the Distinction of Words', *On the Study of Words*, London, 1876, p.111
- 25 ヘルバートの母サラはコールリッジの娘であり、父の死後、夫とコールリッジ作品の収集と整理を継続的に行っていた。そのような家庭環境でヘルバートは生育している。
- 26 なお、マレーが編集に参加して以降、発刊までの経緯については、K.M. Elisabeth Murray, *Caught in the web of words : James A.H. Murray and the Oxford English dictionary* Winchester, 1977 (=加藤知己訳『ことばへの情熱 : ジェイムズ・マレーとオクスフォード英語大辞典』、三省堂、1980年) や、Simon Winchester, *The meaning of everything : the story of the Oxford English Dictionary*, 2003. (=荻部恒徳訳『オクスフォード英語大辞典物語』研究社、2004年)などを参照。
- 27 ロマン派の教育思想をルソーの影響から考える研究としては、ピーター・カヴニー『子どものイメージ』江河徹監訳、紀伊国屋書店、1979年、Morris Eaves, *William Blake's Theory of Art*, Princeton, N.J.: Princeton University Press, 1982, Stephen Gill, *William Wordsworth: The Prelude*, Cambridge University Press, 1991, Perry Nodleman, *The Pleasures of Children's Literature*, New York: Longman, 1992, Janet Bottoms, 'The Battle of the (Children's) Books', *Romanticism* Volume 12, Number 3, 2006など。
- 28 1808年、1813年の講演でルソーの思想に影響を受けている友人をコールリッジがからかい、ルソーを批判するエピソードが紹介されているが、1818年の手紙でコールリッジはこのエピソードは1797年の出来事であったと述べている。Samuel Taylor Coleridge, *The Collected Works of Samuel Taylor Coleridge, Lectures 1808-1819 on Literature*, ed. Kathleen Coburn, Princeton University Press, 1987, p.106, p.586, Coleridge, *Collected Letters of Samuel Taylor Coleridge*, vol.IV, ed. Earl Leslie Griggs, Clarendon Press : Oxford University Press, 2000, pp.879-880.
- 29 Robert Southey, *The Origin, Nature and Object of the New System of Education*, London:Printed for John Murray, 32, Fleet-Street: W.Blackwood, Edinburgh; and J. Cumming, Dublin, 1812
- 30 Charles C. Southey, *The Life of Rev. Andrew Bell*, John Murray, ed. Robert Southey, London: William Blackwood & Sons, Edinburgh.,vol. I, xi.
- 31 William Wordsworth, *The Poetical Works of William Wordsworth*, Vol. 5, ed. E de Selincourt, and Helen Darbishire, The Excursion, Oxford at the

- Clarendon Press, p.473
- 32 Alan Richardson, *Literature, Education and Romanticism, Reading as Social Practice 1780-1832*, Cambridge: Cambridge University Press, 1994, p.95, p.104.
- 33 Alison Hickey, *Impure Conceits : Rhetoric and Ideology in Wordsworth's 'Excursion'*, Stanford, Calif.: Stanford University Press, 1997, pp.108-117.
- 34 Philip Connell, *Romanticism, Economics and the Question of 'culture'*, Oxford: Oxford University Press, 2001, pp.142-144, Laurence S. Lockridge, *The Ethics of Romanticism*, Cambridge University Press, 1989, pp.39-45, Douglas Hedley, *Coleridge, Philosophy and Religion: Aids to Reflection and the Mirror of the Spirit*, Cambridge University Press, 2000, pp.260-285
- 35 チャールズ・サウジーの序文にあるようにワーズワースはベルの評伝の編纂作業に一定の関わりを見せていたし、コールリッジがルソーの批判をしていた1797年から1830年頃までの期間は「一時的」と呼べるほど短いものではなく、また彼らの一連の教育論は児童労働のみを限定的に論じているわけではない。さらにリードも指摘するようにこの時期のロマン派詩人たちの発言はその後のイギリス国内における教育思想や教育実践に対して大きな影響力を持った点で重要である。Ian Read, 'Romantic Ideologies, Educational Practices, and Institutional Formations of English', *Journal of Educational Administration and History*, 28:1, 1996, p.27
- 36 Coleridge, *The Collected Works of Samuel Taylor Coleridge, The Friend II*, ed. Barbara E. Rooke, Princeton University Press, 1969, p.288
- 37 Coleridge, *The Collected Works of Samuel Taylor Coleridge, Lectures 1808-1819 on Literature*, ed. Kathleen Coburn, Princeton University Press, 1987, pp.105-109, pp.581-589.
- 38 Andrew Bell, *The Madras School, or Elements of Tuition: comprising of Analysis of An Experiment in Education made at Male Asrlum, Madras*, London: Printed by T. Bensley, 1807, p.19
- 39 コンネルはこうした政治経済におけるコールリッジの見解が彼の教育論に強く影響していると見ており、1808年の講演ではランカスター批判に加えてマルサスに対する「度を越した攻撃」が見られると指摘している。Connell, op.cit., p.143
- 40 Lockridge, op.cit., pp. 139-154, Hedley, op.cit., p.271
- 41 Hedley, Ibid., p.277
- 42 道徳哲学の直観主義、特にケンブリッジ・モラリストと呼ばれる人々が受けたカントの影響がコールリッジを介してのことだったことは児玉聡を参照。児玉聡、『功利と直観-英米倫理思想史入門-』、勁草書房、2010年、65-66頁。またロックリッジは功利主義の観念連合論と決別したコールリッジが人格形成においてモラルすなわち善を「引き出す」ために直観主義の思想を構築していったことを明らかにしている。Lockridge, op.cit., pp.61-63
- 43 19-20世紀の文化や思想に対するイデオロギーとしてのロマン主義の影響に着目した研究としてはマクガンを参照。Jerome J. McGann, *The Romantic Ideology: A Critical Investigation*, University of Chicago Press, Chicago and London, 1983
- 44 Read, op.cit., pp.37-38
- 45 ペインの教育思想と教育実践についてはオルドリッチを参照。R. オルドリッチ、『イギリス・ヴィクトリア期の学校と社会-ジョゼフ・ペインと教育の新世界』、本多みどり訳、ふくろう出版、2013年
- 46 なお本稿では1883年出版の第二版を参照している。Joseph Payne, *Lectures on the Science and the Art of Education with other Lectures and Essays*, London: Longmans Green & Co., 1883
- 47 Payne, op.cit., p.18
- 48 Ibid., p. 216
- 49 Ibid.
- 50 C.J. Ducasse, 'What Can Philosophy Contribute to Educational Theory?' in *Selected Readings in the Philosophy of Education*, ed J.Park, Macmillan, 1958, pp.9-24, Harry Schofield, *The Philosophy of Education: An Introduction*, Routledge Library

Editions: Education, London: George Allen & Unwin LTD, 1972, pp.30-33, Amasa Philip Ndofirepi, Elizabeth Spiwe Ndofirepi, op. cit., pp. 13-28, Amasa P. Ndofirepi, 'Deciphering Traditional African Education in R.S. Peters' Education as Initiation', *Journal of Education and Learning*, Vol.8 (2), 2014, pp. 98-106.

- 51 イギリスにおけるヤングの思想的影響の様々な可能性については池亀直子、『イギリス芸術教育思想における独創性と公共性-レノルズ、ブレイクとロマン主義の子ども観』、風間書房、2014年、55-79頁を参照。